

2012年作品・長篇ドキュメンタリー映画（カラー）
（二四〇分）

陸軍金戸研究所

監督・編集・楠山忠之

とこの戦争を裏で支えた
秘密戦・謀略戦の兵器開発基地。
極秘だったため、消された研究所ともい
今、関係者が力尽きの前に立つて証言する。

殺人 光線
電波兵器

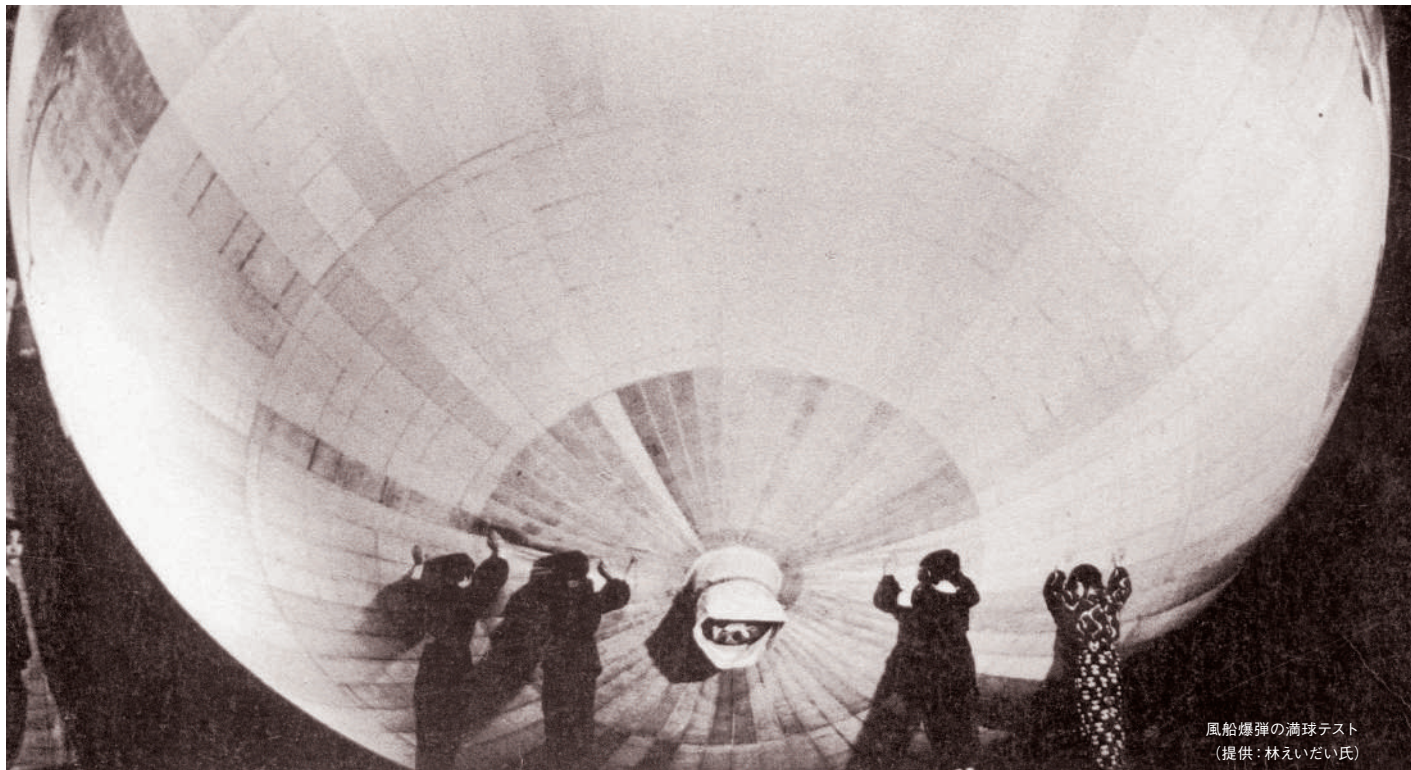
生体実験の道
毒物・爆薬の研究

風船爆弾
生物・化学兵器

二セ礼製造
対交経者謀略



原案 / 日本映画学校「人間研究」
製作 / アジアディスパッチ
宣伝 画配給 / 陸軍金戸研究所映画製作会



風船爆弾の満球テスト
(提供: 林えいだい氏)

東京新聞 (2006年8月30日付)
取材・撮影開始から3年間は日本映画学校生たちが担う



殺人光線や電波兵器、爆薬の開発。毒薬による人体実験。渡洋爆撃の代案としての風船爆弾。中野学校 (スパイ養成所) と組んでの対支謀略作戦における偽札製造。

陸軍科学研究所の中でも最も莫大な資金を与えられ、新兵器の発案に期待を託された「登戸研究所」。1937年12月、南京占領と相俟つかのように川崎市生田の丘陵地に研究棟を建て、敗戦の日まで極秘のベールの中で資源なきニッポンの戦争に智力で勝とうとした。

戦争は誰のために続けたのか

登戸研究所の闇を辿る本作から、
図らずも原発ムラと相似する構図が浮かぶ

スーツ姿や平服。サラリーマン生活そのものの研究所。だが仕事は「人殺し」や謀略のための兵器づくりだ。戦場から遠く隔絶したこの地に血の匂いはなかった。近隣の寒村からじつちゃんばっちゃんまでもが、現金収入を求めて集まって来た。徴用逃れの道でもあった。戦後、証拠湮滅命令で「消された秘密研究所」と言われてきた。歴史の闇に光を当てるべく、2006年から少なくなった当事者を訪ね歩き、いまここに初めて「登戸研究所の真実」を記録した長篇ドキュメンタリー映画が完成した。カメラの前に立った証言者40数名の勇気と、語り継ぐ決意が結晶となった作品となった。

プロデューサー・監督・編集●楠山忠之
撮影●新井愁一●長倉徳生●鈴木摩耶●楠山忠之
録音●渡辺路子
編集技術●長倉徳生
朗読●石原たみ
聞き手●石原たみ●渡辺路子●宮永和中●楠山忠之
ナレーション●楠山忠之
ムックリ演奏●宇佐照代(アイヌ料理「ハルコロ」)